

書 評

Herman H. Goldstine : **The Computer** from Pascal to von Neumann†

末 包 良 太††

ENIAC を始めとして米国の初期の電子計算機の発展に大きな寄与をした大御所が 1000 名を越す関係者の名前を引用して詳しいゆきさつを公表した本書は貴重な刊行である。当事者である著者はできるだけ資料のある事柄について述べ客観性を失わないように努めているがやはり著者の眼を通して見た歴史であり、なかなか生々しい事でもある。

著者は 1936 年シカゴ大学で数学の学位を得た数学者であるだけにアナログ計算機を含めて大体 1623 年から 1957 年までの計算機をめぐる数理科学の背景のたち入った説明がなされていて本書の説得力を強いものにしてている。こういった点で読者に可成りの教養が求められている。これは単なる知識といったものだけでなく、もっと広く解釈して著者が断定をさせている事柄に対する資料の評価や判断にまで及ぶものであるといつてよい。

本書は大別して三部から成り第一部では第二次大戦前の歴史的背景を、第二部は ENIAC と EDVAC を中心とする戦時中の発展を、第三部はプリンストンを中心として戦後の発展の一部を述べてある。付録としてわが国も含めて 19 ヶ国にわたる初期の歴史について簡単にふれている。莫大な資料を駆使して本書が書かれているからといって無味乾燥な事実の列挙であるかという点と全く正反対である。

たとえば著者または ENIAC とフォン・ノイマンとの出会いはフィラデルフィアの駅のプラットフォームで著者が彼に自己紹介しているうちに ENIAC の話が出ると急にフォン・ノイマンの態度が真剣になり、

学位の口頭試験官みたいになった。それから間もなく試作中の ENIAC を見学に行ったが、今度は ENIAC をやっているエッカルトがフォン・ノイマンの試験官役にまわり、ノイマンの ENIAC について発した第一問がその論理的構成に関するものであったので見事にテストは合格であったことが物語られたり、モークリーがスプリンター型で仕事を進めるのに対しエッカルトはマラソン型であるなどの評言が出てくる。以後フォン・ノイマンがしばしばペンシルバニア大学を訪れるようになり EDVAC の基本設計に参加するようになったいきさつ、モークリー・エッカルトのグループとフォン・ノイマンらのグループの分裂、特許権の問題、プロジェクトに対するペンシルバニア大学幹部の態度などが次々と展開される。そこにはこれら幹部には電子計算機のこと、その将来性もよく分っていないばかりか電子計算機に関しては疲れてしまっていたとまで書いてある。このように話は固有名詞と密着しているので実に面白い知的ノン・フィクションである。歴史や技術の必然性と登場する個人とのかかわり合いの中で、本書の中には何かが書かれていない気もする。それは米国の国防研究に由来する秘密事項がかなりあるように思われる。

このような無理な注文は別として本書は資料としても、計算機や応用数学を理解するのに役立つ書物としても多くの読者にすすめることができる。

付録のわが国の歴史を述べた所で ETL Mark II の M. Goto とパラメトロン発明者 E. Goto との間に混同があるようで、評者は 1972 年東京における第一回日米コンピュータ会議で来日された著者に会場でこの点を指摘しておいた。

(昭和 48 年 3 月 16 日受付)

† p. 378, Princeton University Press, New Jersey (1972)

†† 電子技術総合研究所